

二次元ぶち文庫

試し読み版

お さ な 魔 女

ミルキーウェイ

瀧澤 春

表紙イラスト：あおいまさみ

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『おさな魔女ミルキーウェイ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



お さ な 魔 女
ミルキークエイ

瀧澤 春

表紙 / あおいまさみ

登場人物紹介

Characters

ふじみやかりん

藤宮花梨

魔法の国の精霊の力を受けて、魔法少女ミルクウェイになる、幼児体型の少女。

月の光を殺すほどの黒雲垂れこめる草木も眠る深夜。

高層ビルディングに囲まれた寂れた公園。うち捨てられたままになった遊具に身を潜ませた女は、全身から脂汗を滲ませてガタガタと震えていた。

「いやあ。助けて……誰か、誰かあ」

今の彼女に、こんな人気のない場所に逃げ込んでしまった己の失敗を嫌悪する余裕などはなかった。

「……っ」

カバンをあさり、化粧道具の乱雑さに鼻息を荒くする。

たまらず、カバンを逆さまにして中のものを全部さらう。そしてやっと折りたたみ式の携帯電話を掴み取る。

「そ、そんな……っ」

女の双眸に突き刺さるのは圏外、という無機質な表示。女はただただ身体を病的に痙攣させながら携帯を虚空へ傾け、どうにか電波をとらえようとする——しかし。

「みーつけたっ」

無邪気な声。しかしその無垢な声の裏に潜む氷のような冴え冴えとした残酷な響きに女は血の気が引く思いだ。

「逃げきれるとでも思ったのか？」

声のする方に視線をすべらせれば、そこには小柄な少年。黒づくめの衣裳を纏った、整った顔だち。

女の瞳が大きく開かれる。しかしそれは少年を見たからではない。その向こう側の、巨大な二足歩行の人体獣面の怪物を見て——だ。

「グフウウウウ！」

怪物は全身を剛毛で包んだ毛むくじゃらで、その股間には通常の成人男性の二回りは太く、長い怒張が昂奮の火を纏ってそそり勃っていた。

「貴様が大人しくしてれば、ゴーラだってこんなに昂奮しなかつたんだからな」

「い、いやああ！」

ビリビリリッ。

ゴーラという名の怪物は幼児が何でも手にしようとするように、軽々と女の衣服を剥いだ。

「た、たすけてえ」

「ウオオオオオ!!」

ゴーラは慈悲や、救済など知らぬ欲望に塗れた双眸を微笑みに細めた。巨軀は爬虫類のような舌を伸べると、女の裸体をべろろと舐めた。

「ひ、ひいいいッ。き、気持ちわるい……!!」

7

女の控えめな胸が弾み、自慢の小顔が猥褻に歪む。

「あ、いや……身体熱い……熱いつ！」

女は突然身体の奥にボツと火が灯るのを覚えた。全身が微痙攣を催して、陰部がジーンと痺れはじめると痺れはじめると。

「フフ、どう？ ゴーラの唾液には媚薬がしこんであるんだっ」

女は呂律が回らなくなっていた。総身が汗にまみれ、女の中心がカッカッと淫らな火にまさぐられ、たまらない疼きが全身にはしる。

「い、いやあなの。あああ、だめ、か、感じちゃう……」

女の叫び。しかしそこには誰彼構わず男に媚びる娼婦のような卑猥さがあつた。

ツンと乳首が勃ちはじめ、腰にまつろうスカートごし、失禁のように愛液が溢れてくる。
「ウグウウウウ」

ゴーラは雄叫びを深夜のオフィス街に轟かせると、仰向けに倒れる女の細い脚を掴み、左右へ開かせた。

白く濁った愛液が糸引いて、女の肉唇がパツクリと開く。人体獣面へ誇るように、肉の花弁は充血してぷつくりと膨れている。

「ブヒヤアアア」

ゴーラは女の蜜口へ、己の楔を擦りつけた。クチュツと猥褻な水音が弾け、女の蟻の門

渡りを女汁が垂れ落ちていく。

「はああああん！　だめ、挿れないで！　化け物となんかいやよお!!」

女は涙に咽びながら懇願する。しかし両脚はすでに子どもの拳はあろうかという怪物の亀頭の逞しさに悦びのあまり痙攣していた。

だがすかさずゴーラは腰を引いてしまう。

「はああ……ッ?」

女はどこか拍子抜けな、しかし些か水飴を混ぜたネットつく喘ぎをこぼす。

「ぐひいっ!!」

再びゴーラは突き立てて、今度は膣入り口へ僅かに食い込ませた。女の顔が期待と苦悶の入り交じる情欲の熱気に彩られる――が。

「アアッ……ぬけちゃう!」

ゴーラはその巨体とは裏腹な小回りの利く腰づかいでまた引いた。

「グヒャッ!」

もう一度嘲るような浅い挿入。女は白目を剥いて、だらしなく口を開けた。たらりと涎が垂れる。

そしてまた引き抜こうとする。しかし。

「ま、待って。お願い、抜かないで!!　抜いちゃいやああ……」

女は感情が壊れてしまったように涙を流し、声を鼻にかけさせて媚びる。

「お願い、も、もう耐えられないの……私に頂戴、ください……あなたの凶太いの、欲しい……ッ」

女の胎内はすっかり媚薬に汚染され、愛液は火の付いた灯油のようで、子宮を中心とした牝肉はグズグズに蕩けていた。

「へえ、いいの？ ゴーラは人間じゃないぞ。化け物なんだぞ？」

麻薬中毒者のような常軌を逸し、魂が怯えるような少年の声。

「い、イイの！ それでもああ、そのぶつといのを、は、早く……頂戴よおっ」
ついに女は甘露な欲望に屈服した。

「少し遊んでやれ、ゴーラッ。だけど殺すなよ、母胎適合者かもしれないからな」

「ウゴオオオオ——!!」

巨軀は少年の声に応えるように哮った。そしてその巨体を、女の股の間へ滑り込ませようとした、その時！

「ギヤアアア!!」

響き渡ったのはゴーラの声。哮りとは似ても似つかない悲鳴だ。

見れば、巨軀の胸元に青白い炎がまとわりついて燻っていた。

「そこまでよっ！」

黒雲がゆるりと風に流される。控えめな月が寂れた公園に光のスポットライトを降り注ぐ――。

天然の輝きを縁取るのは小柄な影。空気の流れに靡くのはツヤツヤの黒髪ショート。衣裳は水色を基調にしたフリルドレス。胸やお尻の肉づきはまだまだながら、スツキリとスレンダーな体型は弾ける元気がいっぱいに表れていた。

スカートは少し短めで、太ももの半分から下が大胆に露出している。

ホワイトニーソックスで健康美に輝く脚を包み、靴はワンポイントにリボンのついた愛らしいデザインシューズ。両手にはホワイトグローブ。そして右手に握っているのは先端部に天使の羽をデザイン化したステッキ。

「悪い人たちゆるしませんっ！ 魔法少女ミルキーウェイ、ただいま参上ですっ」

甲高いながら、勇気と親愛に輝く凜とした声が空気を揺らした。

「デスフリート！ もう勝手なことはさせない」

小柄な体躯を闇に躍らせて、ミルキーウェイはステッキを構える。

デスフリート、そう呼ばれた少年はフフフと不敵に笑った。

「ゴーラ、ミルキーウェイをズタズタに引き裂けっ」

ゴーラは口から涎を吐き散らしながら、猛然と襲いかかってくる。

しかし魔法少女は怯むことなく、むしろ自分の方から立ち向かう。

「光よ、ボクに力をかけて！ ホーリー・エクスプロージョン!!」

それはさつき、ゴーラの身体の一部を灼いたワザだ。

しかしさつきのよりも威力は二倍、三倍にまで高められていた。ステッキの先端から光球が生み出され、やがて巨軀を貫く――。

ズバアアアアアアアアンンンンンッ!!

「ぎいああああああ」

断末魔の声を上げ、ゴーラは青白い炎に全身を包まれてしまう。やがて完全に焼き尽くされて、白い灰へと化した。

「さあ、次はあなたですよ、デスフリート」

「……フン、つまらん。お前の相手をしている時間なんてこっちにはないんだ」

デスフリートはそう言うと言とマントを翻して闇の中へと消えてしまう。

しかしミルキーウェイはそんなことには頓着せず、すぐに女性の元へ駆け寄った。そして。

「元の素敵なあなたにもどってください！ ……ホーリー・レイ!!」

胸のところでステッキを構えれば、ステッキの先端は虹色の輝きを生み出す。その閃光は媚薬に狂う女を照らしだす。やがて彼女の性欲に耽溺した妖しい顔は静けさを取り戻し、青白かった顔色は元の正常な肌の色を取り戻した。

「お肉がいっぱいついてて、色っぽい股だ」

二重布を掻く指先が少し早くなる。下着の裏地と秘部のお肉とが擦れて、少し痛かった。刺繍針でチクチク刺されているようだ。

「やめて。ボクのに、触らないで」

抗議の声も尻窄みになってしまふ。未体験な事態に直面して、少女の心は完全に動転していた。

「触られたことないのか？」

「な、ないよ、そ、そんなこと……っ」

パンツごしに機械的な動きで手を動かされる。それは幼い頃、母親にトイレのあとおまを拭いてもらった幼い記憶を思い出させる。しかしデスクフリートの手付きと、母親のものを比べれば、明らかに魔術師の手の動きに親愛の情は皆無だ。

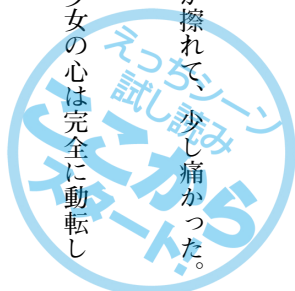
ゾクッ……。

一体何度目か。指が擦れた瞬間。少女の下腹に冷たい波紋が一度流れた。

(ど、どうしたの今……ボク?)

気がつくくと、息が上がりはじめていた。身体のどこかに火が灯ったように火照りだす。思考がうまくまとまらない……。

「ハハハ、濡れてきたぞ」



瞬間、おまたから頭へと氷の飛礫つぶてが突き抜けるのを感じた。

「え、え……？」

少女は酸欠のように意識が遠のき、あやうく卒倒しかける。

奇妙な感覚だった。身体の芯は燃え、灼けているのに、身体の表面は血流が凍りついたように冷たい。

「見ろよ」

魔術師は今まで下着を擦っていた指を見せてくる。そこはまるで水飴でもすくったようにテラテラと妖しい輝きを放っていた。

(うえ、ど、どうして、ぬ、濡れてるの……?)

考えようとするのだが、意識は上滑りして定かでない。しかし身体の奥底で灯った火は、彼女の意思とは関係なく大きく膨らみ続ける。

(ボク、お漏らししちゃったの……?)

きつとあんなにおまたをこするからだ、ぼんやりとした意識のなか思う。

今まで自ら慰めたことや恋人に愛されたことのない少女は、性感が疼き、そして自然な女性の反応というのを理解することができなかつた。

「くく、エッチな身体してるな！」

デスフリースはショーツへと手をかけると、一気にズリ下げてきた。

「ヤッ……いやあああああ！」

鈍くなった意識のなかでも、ショーツをズラされることだけはしつかり認識できた。外気がおまたをくすぐり、露わになった薄い膨らみの肉丘を撫でつける。

「いやああ……見ないで、み、みないでえ。ボクの見たら、だめだよ——！」

羞恥心が意思を持った火のように、少女の肢体を炙っていく。

「へえ、お前おま○こに毛え、はえてないのか」

下腹から続くささやかに盛り上がるお肉の土台の上には何もなく、そのために一筋はしつた女裂はささやかで、こまやかだ。

「やあ、だめ、みちや、だめええ……！」

自分でも気にしているところを覗かれ、指摘され、少女は細い顎をグンツと反る。

「やめ……やめろお……」

魔法少女は藤宮花梨として哀しみの声を上げた。

同年代の少女たちと比べると成長の遅い肉体。薄く色づきはじめて肉ヒダはまだ未発達で、大陰唇のポリウムも未熟。しかしかえってその未熟性が、青い果実を回収する時のちよつとした神秘的な感慨を見るものに与える。

「だめ、見ないで、みないで、ボク、恥ずかしい、恥ずかしいよ……っ」

「うるさい小娘だな。お前はエッチな女なんだ！」

ヒクヒクツと声を上擦らせるミルキーウエイは、不意にデスフリートから引き裂かれたショーツを顔へ押しつけられてしまう。ピタと冷たい感触、次いでヌラツとした粘っこさ。鳥肌が気持ち悪いほどに立つ。

(ボク、お漏らししちゃった……)

あまりに恥ずかしい事实に、顔が青ざめる。

「……いいか、それはお前がエツチな女の子だつていう証拠なんだ。分かるか？」

「ぼ、ボク……えっちなんかじゃない——あう！」

露わになった陰部に刻まれた秘裂に指をあてがわれる。すると小水とは違う、しかし確かな水気が、デスフリートの指ごしに感じられてしまった。

そしてこれみよがしに魔術師はゆっくりと指を引いていく。ツーツと銀糸が伸びて、卑猥な煌めきを発した。

「ひい、あう！」

背筋に冷徹な雷鳴が通り、魔法少女は呻いた。

「……安心しろよ、お前みたいなヤツは珍しくない。それに俺はそういうエツチな娘はキライじゃない」

おもむろに自らの股間に指を這わせるデスフリート。

(……ボク、なにされちゃうの!!)

ズボンの合わせ目から、ヌツといきり勃つた肉棒を取り出す魔術師の姿に、魔法少女は不安感をかきたてられてしまう。

(ううう、へ、変なおい……うう、く、臭いよお……っ)

嗅覚を捻られるような悪臭に少女は吐き気を覚えてしまう。それはデスフリートの下半身からよつきり出ている腐肉からだ。血管が浮き出たそれは赤ん坊の腕ぐらいの太さで、先端は綺麗なピンク色でヌメヌメしている。それを見ると、アンモニア臭の刺激臭に胸が苦しくなると同時に、下腹の奥で妖しい感覚が閃いた。

「いくぞっ……」

「い、いく？ え、ええ……っ？」

こぢんまりとした肉の裂け目に野太い剛直が突きつけられる。心臓が止まりそうなほどの驚きが差し迫った。

「あああ、い、痛い!!」

雷鳴が鼓膜のすぐ近くで閃くような衝撃に、身体が竦む——同時。

「痛い、痛いよ！ や、やめてよお!!」

必死に抵抗しようとするが、黒い十字架に磔にあつた少女の魔法エネルギーは摩耗してしまい、最早満足に動かすことはできなかつた。

「きやああああああ……っ」

ズリリッ！ 身体が裂けるかと思うほどの衝撃に全身が痺れた。

「ひああ、いい、きいいいいい……!!」

下腹のなかを抉られるような衝撃に、全身の血の気が引いた。魔法少女は齒列をキラリと覗かせながら、総身が粟立つようなスリルに慄然とする。

「ハハハハ、奪ってやったぞ。ミルキーウェイのはじめてをなッ」

魔術師は不敵に笑い、腰をゆする。

「はうぐ！」

サンドペーパーで膺を思いつきりしごかれるような刺痛感が下腹から、眉間へと電撃的に抜けていく。

「あうう……痛い、痛いよう。うう……おまたから血い、でちゃってるよお……」

さらにそこは今まで見たことのないほどにはつきりと広がり、長大な異物が食い込んでいた。あふれでる鮮血——破瓜の証。

「どうだ、はじめてあじわう男の味は？」

「ふえ……ええ……」

下腹のなかを切り裂かれた痛みと、下腹への重厚な衝撃に醜酌する。瞳に浮かぶ光は弱々しく、今にも奈落の闇へ落ちてしまいそうに虚ろだ。

「アア！」

グチュ、又チュ、グチャ。野太い勃起はゆっくりと抽送されていく。

「フフ、痛がってた割にはおま○このほうはそうでもないらしい……」

腰の揺さぶりに鼓動を一つにして、破瓜の鮮血がこぼれる。魔法少女は贅肉をころがされる鈍痛に咽んだ。

「やっぱり処女の具合はいいな。ギユギユツつてしめつけてくるぞ」

魔術師は加虐的な微笑みを浮かべながら身体をさらに激しく動かしていく。自分の身体のなかを巨大ななかでぐちゃぐちゃにかき混ぜられる。

（ボク、こわれちゃうよ……うう……）

その巨大な肉塊による強制力と、圧迫感とが対流を生み出す。

「うん……ああ……むぐうう！」

下腹にある行き止まりのようなところを叩かれるたび。

痛みとは違う妖しい戦慄が臍の奥を中心に広がる。それは女の本能に直接訴えてくるような抗いがたい、幼児をも娼婦に変えるような魔性の賛美歌のように響き渡る。

「感じてきたみたいだねっ」

魔術師は笑う。

なるほど。接合部分から、血液とは違う、トロリとした透明な液体がこぼれていた。するとその液体が潤滑液の役割を果たして、勃起の動きを促す。

「ひあ、あああ……だめ、ぬいて、ぬ、ぬいて……!!」

乱暴な抽送に翻弄されはじめる少女。さつきまでの激痛は影を潜め、かわりに舞い降りた痺れとも、むず痒さとも知れない官能的な感慨が、少女の理性を思考を圧倒した。

やがてただでさえ少女の小さな身体に大きな負担だった異物がさらにその大きさを増した。

「な、何、なひい……ッ!？」

そしてマグマがゆつくり流動する感覚がしたかと思えば――。

まともに考えるより先に、炎がしぶいた。ドビュ、ドクククッ……ズビュルルル!

「ぐう!!! あついいい……あついいいよおおお!」

魔法少女は精液を盛大に中出しされてしまう。下腹のなかに熱湯を注ぎ込まれるような灼熱感と、粘膜を穿られる苦悶とが緋い交ぜになって、意識へ激震がはしった。

ズツと陰部から長大な勃起が引き抜かれる。身体との比率を考えればあまりに均衡をかくほど、肉孔は広がっていた。未発達な柔褻に絡みついた白辱が艶めかしく、粘膜の色と対照的だ。

「あ、うんっ」

魔法少女は脂肪の薄い四肢をピクピク痙攣させる。

「さあ、お前の痴態を皆に知らしめてやるぞ!」

デスフリートが指をパチンツと鳴らせば。

突然少女の身体を縛めていた黒い十字架が一気に熔けはじめた。

「キヤア……!!」

解放される形になった少女は四つんばいに、俯せに地面に倒れる。

「ひ、冷たいいい」

次の瞬間には、お尻を誰かに撫でられる不快な感触。全身が鳥肌立って、氣持ち悪さに慄然とした。

「ふあああああ……!!」

お尻を撫で、尻朶しりたぶを抓るような刺激はやがて収束する。だがそれは意外な収束点——アナルだった。

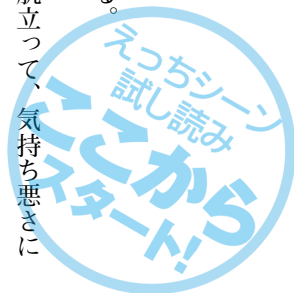
「ふえええああああ……きちやう、ボクのなかにああああ、いやあ、らああああああ……!!!」

ミルキーウェイは天地が動転するような異常感覚に、かわいらしい顔を壊して、白目を剥きだした。

しかしそれも当然だ。アナルへと一斉に流入してきたのだから！

「はおおはおお——ツツツ！」

眉毛を手折る魔法少女。後孔の窄まりをペロペロと泥水に舐められるような気味悪さに



襲われたかと思えば、粘膜が軽く突き上げられ、カッと頭の中が一瞬にして沸騰する衝撃に襲われたのだから。

(い、いやあ、ボクの身体どうなっちゃうの、く、くる、苦しいいいい……)

街頭モニターの映像も、いつの間にか、四つんばいになる少女の肛門へどす黒い塊が注入されるのが一目瞭然だ。少女は頭がおかしくなるような肛門調教を見るハメになつてしまふ。

(ボクの、ボクのお尻、ひいい、すごいひろがつちやつてるうう……)

ミルキーウェイは髪を揺さぶり呻いた。アナルの皺が解きほぐされ、小指大に広がる。紅い粘膜が垣間見え、そこへ真っ黒な異物が入り込んでいる。下腹が圧迫され、小さな身体が甘く軋んでいく。

「どうだ、ミルキーウェイ！ お尻の具合はっ!!」

デスフリートが高笑いする。

「あつい、おしり、あふいいいいい！」

ゾクゾクツと体内への流入姦にもなつて妖しい痺れが細身を疾走する。未開の不浄孔が未曾有の刺激に曝され、肛門粘膜はジクジクと疼痛が嵐のように暴れていた。尻朶はびくびくと跳ね、お尻の割れ目が卑猥に息づく。

「ふうわ、いや、痛い下腹、おなか……ああ、やぶれるるふううう……!!」

臓腑が押し上げられて、全身が訳も分からず蠢動する。

だがこんな緊迫した状況下でさえ、媚肉はチリチリと焦げつくのだ。柔褻に火が灯るように甘くジクジクと蕩けていく。

少女は腕立て伏せの出来損ないのような格好をして、上体を反り返した。

（ああ、裂けちゃう。下腹、ボクの下腹こ、こわれひやあ……アアアツ……）

「ホラ、みろ。ミルキーウェイ。お前の恥ずかしい姿を男共が貪るように見ているぞっ」魔法少女が顔を苦悶の表情で持ち上げれば、街頭モニターに映るのは黒い異物がケツ孔を剝り抜く瞬間だった。まるで排泄物が逆流しているようなおぞましい光景だ。

「いやですう、みちやいやあ……ボ、ボクのボクのみないでええ！」

少女は必死になって手を動かして、アナルを守ろうとする。しかしそんな姿も、遠目に見れば自ら異物挿入を促し、さらにはアナルの自洩を愉しんでいるようにしか見えない。

「おい、あいつ、ケツ穴いじってやがる……」

「ああ、魔法少女だって言ってるけど、ただの変態コスプレ女じゃないのか？」

「藤宮花梨はエロエロ女子高生なんだ」

突然脳幹に閃く複数の知らない声——それらが、見えない鋏やじりとなつて少女のアヌス粘膜へ突き刺さり、内臓へ炎の棒をつっこまれるような暴虐感を生む。だが少女はそれにさえ、何とも言えない陶醉感を覚えてしまうのだ。

(なんなのこれ、いやよ……ボクボク……ボクうう……!)

少女が驚きのあまり表情を硬直させると、魔術師が笑った。

「聞こえただろ、ミルキーウェイ。今のがお前が、身を挺して救おうとした人間共の心の内だっ」

「そ、そんならああ……!」

清廉な少女には死にも等しい恥辱の海に沈んでいく。凜とした瞳に涙を滲ませる。

グリユリユリユリユ……グルルルルル。

獰猛なケモノのような叫びが下腹から聞こえてくる。

(そんならめえ……あ、あああ)

腸腔をいっぱいに充たす異物の熱量に、理性が飽和していく。まるで鉄棒でアナルをかき混ぜられるような破壊的流入で、腸粘膜がミチミチと軋む。

(ら、らめえ……もうそれ以上ボクのなかにはいつてきちゃあ、だめだよお……)

袋小路に迷いこんだように、甘美さと息の止まりそうな苦悶とが衝突する。

「苦しいだろ？ 死んでしまえようだろ？」

少女は必死に首を横に振った。しかし誰の目にもそれがただの虚勢であることは分かきつていた。

「安心しろ、すぐに楽にしてやるから！」

「う……ン……ら、楽……うむ？」

すると。肛門が窒息寸前の生物のように悶え狂うのを感じた。

（ナニ!? なんなの!?)

張った下腹がさらに膨張するような圧迫感に涎を垂らす魔法少女。

そして直感した感覚はあまりに短すぎる戦慄だ。

（ああ、で、でちゃう!!）

襲ってきたのは理性を噛み砕くような、水蒸気爆発を起こしかねないほどの強烈な排便欲求。少女は咄嗟にお尻を手で覆った。

だがそれは無駄なことだ。腸全体が一本の天然の注射器のように、すでにピストンの押し込みはジリジリとはじまっていたのだから。それを止める術はどこにもない。

「漏らせ、漏らせ」

尻の粘膜が煮え立ったシチューのように何もかもぐちゅぐちゅになってしまっそうだ。

「うわ、もうあんなにアナル広がってやがる……くそ、ブチこみてええ！」

粘膜が引きつり、指で痛いぐらいにこすりたい衝動が全身を疾走する。指先がピクピクンと痙攣するように爆ぜた。

「変態女め、くそ、今すぐアイツを犯してやりてえ」

（そんなこといわないでよ……いわないでえよお……）

自我を軋ませ、ひび割れを生じさせる無体な言葉の数々。それらが少女の身体のなかに淫蕩な気流を生じさせて、ミルキーウェイとしての理性を溶かしていく。

「いや、だ、ああ、みないで、きやう、ああ、み、みないでええ……へんなことお、おもわないでくださいいい……！」

悪態罵倒蔑み——あらゆる悪感情が少女の意識をショートさせようと雪崩れ込んだ。アナルの粘膜が焼けつき、止まることをしらぬ燎原の炎は少女の全身を貫く。

「はあああぁッ……」

お尻をプリプリ振りながら、少女は煩悶の声を抑えきれない。やがて、肛門で火打石が叩かれたように火花が散った。

「……………」

少女の顔がフツと青ざめる。

街頭モニターに映しだされた肛門の窄まりは、まるで蕾が綻ぶように弛む。それまでのピンツと張られた糸が激しい衝撃で千切れる——。

プツチャアアアアアアア——！！

アナルを幹竹割からたけわりして、肛孔から真つ黒な液物が噴流した！

「はあああああああああああああ!!!」

天国と地獄とを同時に垣間見るような崩落感に、一気に頭の中は真つ白に灼けた！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>